

序

「ふるさと」という言葉は、日本人ばかりでなく世界の人々にとっても、それぞれに全く特別の意味をもつものであろう。ある人にとっては、生まれ育った自然そのもののような山や川の近くの土地であるかも知れない。またある人にとっては、どこかの坂道の途中でいつも通る度にふり仰いでいた、一本の老いた桜のもとであるかも知れない。

『伊勢物語』の主人公である、「むかし男」としてのそれは、魂の故郷であり、都からはそれほど離れていない、奈良の地であった。「おもほえずふるさとに、いとほしたなくてありければ」という状況の中で「女はらから」を垣間見る。「ふるさと」と「女はらから」はこの瞬間に、文学史上、分離されたい絆で結ばれたのではないだろうか。光源氏にとっての「女はらから」は決して限定的ではなく、「故郷」を感じさせる女性全般にまで、その意味を深めていくのである。

この書の始めの数本の論は、この「女はらから」論となっている。書かれざる世界により書かれた世界は分厚く支えられている。「なまめいたる」という言葉の持つ美的な感覚も『源氏物語』の女性達の多くによって、共有されているのであろう。

ロマン・ロランの『ジャン・クリストフ』の冒頭で、叢の中に故郷の大地の香を見出す少年のように、『源氏物語』という大交響曲もまた、故郷と結びつく語感の「女はらから」を求めて始まったのではないだろうか。

本書は五部から成っている。

第一部では、人間関係性を取り上げた。日本という国が、東アジアの海に囲まれ、温暖な自然環境の中で、安穩に

平和だけを謳歌できる日々は、もはや失われつつある。災害の多発や、紛争の火種は、遠い他国のものばかり傍観することを許さないほどに、迫っているのである。

何よりも、国際関係が重要であり、いかに他国と友好を保っていくかが問題になる。文学や芸術の分野でも、個の閉鎖性への傾きよりも、境界を緩やかにして相互の関係を軸に発展する動きが加速している。

人物関係とせず、人間関係としたのは、作中だけに止まらず作者と作中人物の関係性ということに関心を抱くからである。テキスト論の立場からは、安易な見方を慎まなければならぬが、実践という意味での、史実からの離陸を試み、その虚構化に心を注いだ数年のことを振り返って見る時、いかにこの関係が奥の深いものであるかを知ったのであった。

仇敵といわれるような関係は、どのように発生し、どう処理されたか、されざるをえないかを追跡してみた。

母子の関係性には、あえて疑義を挟んでみることによって、虚構の中の真実が、こうしかあり得ないという形で現れてくる様を辿ることにした。

以上は、この本を纏めるに当たって書き下ろしたものである。

第二部と、第三部はこれまでに発表したものに、加筆、修正したものであって、できる範囲で、新刊書を上梓される度に頂戴したことに感謝をしながら、最近の学説をも取り込もうと努めた。

第二部は、作品生成の過程において、方法とも言えるような回路を見出し、文体的なもの、時間意識に係わるもの、美意識の問題などで、掘り下げること考えた。

第三部においては、それぞれの言語表現の奥深い構造について、探索を試みた。

第四部では、京の移り行く自然の中で、土御門邸の記述に始まる『紫式部日記』とそこで明らかにされる、紫式部

の人間関係について考察する。過剰なまでの、他者への心遣いや意識があった。疎外感を覚えて動揺し、親しい関係を構築することへの逡巡の心を持ちながらも、ざりざりのところでやはり繋がりを保つことを考える。瀟洒で繊細、典雅な貴族文化のただ中にありながら、冷静に周囲を見つめて、中宮彰子後宮での事柄と事の心を書き止め、描き出していく。

作中人物の中では、関係の深い紫の上を取り上げる。寛弘五年、敦成親王の五十日の宴席で、藤原公任は、紫式部の近くから「若紫やさぶらふ」と問いかけた。紫式部と紫の上とはこの時以来、近しい関係となつたとせねばならぬであろう。身の処し方、倫理観、物事の判断の基準価値観などにおいて、紫式部と作中人物は相互に影響しあっているのではなかっただろうか。

第五部では、「女はらから」論の領域に含まれるものとして、『紫式部集』の冒頭歌を中心にして、「友」「はらから」に対しての魂の共振性のようなものを探ってみたいと試みた。「友」との間の擬似姉妹の関係は、この世では別れそのものを意味するように儂い。『伊勢物語』初冠の段の「女はらから」は、「むかし男」にとって、ごく近い身内的な懐かしさを伴う存在であった。その関係性にも容赦なく現実の苦悩は忍び寄る。憎悪や嫉妬のために崩れていくことも往々にしてあったのだ。それでも、一筋の切れそうで切れない絆を求めて、人生を歩む。

『源氏物語』の世界ばかりでなく、広く海外の作品にも目を配る事が必要であろう。その意味から英国の短編作家についても、既視感という共通項に注意しつつ論じてみた。内と外としたのはその含みによるものである。

目次

序	1
凡例	14
第一部 『源氏物語』の人間関係性	15
第一章 『源氏物語』「女はらから」論——総括的見地から	17
はじめに	17
1 『長恨歌』からの離脱——「母恋い」からの出発	18
2 草子地と書かれざる世界——表現にひそむもの	21
3 「色好み」と「女はらから」——共有する基底	24
4 桐壺系、帚木系、それぞれの「女はらから」——幾つかの論拠	25
まとめ	29
第二章 『源氏物語』の「女はらから」とその准拠	33
はじめに	33
1 『源氏物語』の「女はらから」——伏流水として	34
2 藤原高子の幻影と実像	38
3 勸修寺の流れと莊子、嚴子、恵子——莊嚴する心	40
4 安和の変と異母妹・愛宮——政変の中で	41
第三章 先行文学と「女はらから」性	53
はじめに	53
1 神話の世界の暗闘	54
2 『万葉集』の「妹」——大伯皇女の真摯な愛情	57
3 『篁物語』の異母妹との交情	60
4 『大和物語』の「桂」の皇女の思慕	63
5 『伊勢物語』の「女はらから」と故郷	65
6 『宇津保物語』の「あて宮」と品位	67
まとめ	69
第四章 『源氏物語』の人間関係性における虚構と真実	73
はじめに	73
1 『源氏物語』の母子関係性	74
2 准拠となるもの——『栄花物語』の視点	78
3 紫式部の経験とその影響	81
4 端役としての中将の君——明石の君との比較	83
5 中将の君の転換点——引歌の可能性	85

6	虚構の中の真実の母へ……………	89
	まとめ……………	92

第五章 光源氏と仇敵の関係性——既視感を軸として……………

	はじめに……………	97
1	誹謗と中傷の渦——更衣の死……………	98
2	敵愾心を消すもの——女歌の世界……………	101
3	自重する心——隱遁志向……………	108
4	身の処し方——紫式部自身へのまなざし……………	112
	まとめ……………	114

第二部 『源氏物語』の生成過程……………

第一章 「みやび」と「ゆほび」との美意識……………

	はじめに……………	119
1	「みやびか」と「ゆほびか」の語の基底にあるもの……………	121
2	「ゆほびか」なる地——播磨の持つ特質……………	123
3	「ゆほびか」の心象風景と明石の君……………	125
4	「いちはやきみやび」と紫の上——若紫のすり衣を媒介にして……………	126
5	六条院の「みやび」——その達成と規範性……………	130
	まとめ……………	132

第二章 『源氏物語』の時間意識……………

	はじめに……………	135
1	取り戻される時間……………	136
2	女房達の心の遍歴——怨嗟の果て……………	137
3	包摂される時間……………	139
4	引歌による伸縮……………	141
5	手習巻の時間意識——浮舟の最終詠……………	143
6	『白氏文集』の詩句の磁場……………	145
	まとめ……………	146

第三章 『源氏物語』の神話的発想……………

	はじめに……………	151
1	「光」をめぐる表現——『竹取物語』の影……………	152
2	浮舟をめぐる表現……………	154
3	「天照らす」神話の時空……………	157
4	薫の優雅な暴虐……………	160
5	覗き見られる側から覗き見る側へ……………	162
6	浮舟の籠りの時空……………	165
	まとめ……………	168

第四章 『源氏物語』生成過程の発想の回路——心理の揺れを軸として……………

	はじめに……………	173
1	話型と発想の回路について……………	174

2	近世の解釈——「照応」と「伏線」	176
3	女房達の活躍	178
4	紫の上の二条院引き取り——浮舟の対岸への連れ出し	180
5	紫の上と浮舟の造型に共通の発想	182
	まとめ	184

第五章 若菜——逆光の構図

	はじめに	187
1	六条院の蹴鞠——春の夕影	187
2	青春の青海波——秋の夕影	191
3	「ゆゆしき」逆光の夕影	193
	まとめ	194

第三部 『源氏物語』の表現の構造

第一章 「色草」と「言草」の六条院

	はじめに	199
1	催馬楽「この殿」と春の町——「咲く草」など	200
2	玉鬘引き取りと夏の町——色々の草	201
3	情報の伝搬——言草の増殖	204
	第二章 「まごころ」の三文字と末摘花	209
	はじめに	209

1	過剰なる醜の負性	210
2	非凡なる愚直さ	211
3	神話的生命力としての笑い	212
4	「まごみ」と失われた原郷	214
	第三章 「忘れ草」の表現の基底	217
	はじめに	217
1	須磨巻の紫の上と「忘れ草」	218
2	『土佐日記』の回路	220
3	逆転の発想	221
4	宇治の世界と「忘れ草」	223
5	浮舟と「忘れ草」	224
6	歌語としての「忘れ草」	226
	まとめ	227

第四章 「しこのめ」——暁闇の惑い

	はじめに	231
1	宇治 橋姫巻の垣間見の時空	232
2	空蟬 夕顔巻の別れの時空	236

第五章 「ゆかり」「よそへ」「なずらへ」の回路

	はじめに	241
1	法華経の影響	242

2 (從地) 涌出品と作中人物	244
3 「ゆかり」の回路	246
4 「よそへ」の回路	247
5 「なずらへ」の回路	250
6 潜在王権の確立と崩壊	252
まとめ	253
第六章 「深き夜のあはれ」の時空——若菜巻以後の世界	257
はじめに	257
1 落葉の宮の心情	258
2 「もののあはれ」へ	261
まとめ	264
第四部 『源氏物語』と紫式部	267
第一章 『紫式部日記』における人間関係性	269
はじめに	269
1 日記と人間関係	270
2 「物語」という言葉の意味	271
3 作品としての「物語」	274
4 個人としての女房名、職名	275
5 「書く事」を媒介として	277
6 所謂消息文と内面的自己との関係	278
まとめ	281
第二章 紫式部と作中人物の関係——紫の上の未完の人生	285
はじめに	285
1 紫式部への問い掛け	285
2 信頼により結ばれた源氏との関係	287
3 高貴な朝顔の姫君の存在	289
4 六条院での中心であり周縁である定位	291
5 正室であり続けられない苦悩と祈り	293
6 魂の根源を求めて	297
まとめ	298
第三章 紫式部と庶民の関係	303
はじめに	303
1 『伊勢物語』の残したもの	304
2 須磨の浦の饗応	306
3 饗応に透視されるもの	308
まとめ	310
第五部 『源氏物語』「女はらから」論の領域の内と外	313
第一章 紫式部とキャサリン・マンスフィールド——『園遊会』の人生論	315

はじめに……………	315
1 紫式部との類似と相違……………	316
2 『園遊会』における人生……………	317
3 老いに対する思考……………	319
4 「待つ」という言葉と「もののあはれ」……………	321
5 憂愁と未知への一歩……………	322
まとめ……………	324
第二章 紫式部の個性と性格……………	327
はじめに……………	327
1 光源氏の本姓……………	328
2 作者との無限の距離……………	329
3 冷静さと忍耐力……………	331
4 政治的分別……………	332
5 変化と変貌……………	334
6 反映する個性……………	338
7 憂愁の人生観……………	340
8 恒久志向……………	343
まとめ……………	344
第三章 『紫式部集』と「女はらから」論……………	347
はじめに……………	347
1 冒頭歌の位置の特異性……………	347
2 童ともだちと「女はらから」……………	350
3 『更級日記』と「女はらから」……………	353
4 「女はらから」の現代的意味……………	356
5 『源氏物語』の女性達と「女はらから」……………	358
まとめ……………	360
初出一覧……………	363
【資料】紫式部系図……………	366
あとがき……………	368
参考文献……………	371

凡例

- 一 『源氏物語』の引用は、『新編日本古典文学全集』（小学館）により、原則的に巻数とページ数を記した。
- 二 『源氏物語』以外の引用については『』やページ数を適宜省略したところがある。
- 三 引用の漢詩、漢文について、また、昭和初期の論文などにおいて、読みやすいように表記を少し改めたところがある。